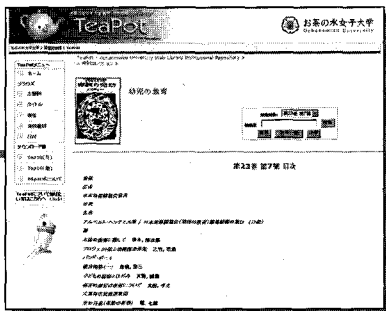


## ▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (10)

### 読み手の倫理観

吉村 香



お茶の水女子大学附属図書館の WEB サイト  
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ  
クション（略称 TeaPot）」にてバックナン  
バーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

#### ▼研究と資料収集

『幼児の教育』がネット公開されることになったことを知ったのは、昨年（二〇〇八年）の第九号誌上でした。その後、『幼児の教育』誌上で紹介されるネット公開に関する記事を拝読してまいりましたが、中でも本田和子先生の力ある問題提起には、保育研究者として先行研究に襟を正す思いでありました。保育の研究者を志した自分の原点に立ち返る機会となりました。

一方、「宝の山」が掘りやすくなるという豊田一秀先生の論考ももつともだとなすいたものです。では、私にとって『幼児の教育』がネット上で閲覧できることはどのような意味があるだろうか、このたび、改めて自問する機会をいただきました。

私はお茶の水女子大学の大学院に入る前、東京都内の某私立大学の教育学科に在籍していました。いわゆる教員養成の学科で、幼稚園教諭の養成課程もありましたが、図書館には『復刻版幼児の教育』のほんの一

部があるだけでした。私は卒業論文のテーマを氏原銀

の実践史とし、図書館のカウンターで手渡された「○巻を所蔵している一番近い大学は○大学、△巻は△大学」と書かれた紙を手に、「幼児の教育」を訪ね回る日々を送ったのです。明治当時の保育界の動向を理解するのにもつとも頼りとなる『幼児の教育』は、当時の私にはなかなか手が届かないという意味で、大変貴重な存在でした。手にするまでが苦勞の連続だったわけです。そのうえ、貸し出し期限内しか手元に置けないし、おびただしきコピーを整理しながら読むことも、まだ慣れていませんでした。そして何より、全巻そろっているのを目にすることがなかったので、自分に必要な記事を特定すること自体が難儀なことでした。もちろん返却にも交通機関を使って足を運ばねばなりません。その後、お茶の水女子大学に入ってからはそのようなことがなくなつたので、懐かしい思い出などと言えます。また、研究の「いろは」を学ぶ過程でほかに替えがたい原始的な苦勞ができたことは貴

重な体験であつたと考えています。

けれども全国の多くの学生、研究者が今もなお、同種のご苦勞をなさつて保育研究に取り組んでおられるだろうと思いはせるにつけ、それは誰にも必要な苦勞なのだろうかと首をかしげるところでもあります。ですから、『幼児の教育』がネット公開されたことを、私は大変喜ばしく感じております。

しかしすでに指摘されているとおり、ネット公開によつて資料入手の苦勞が払拭されることで、先行研究への畏敬の念が薄れる可能性は大いに懸念されることろでしょう。ただでさえ、先人の成果をきちんと踏まえて研究の歩みを踏み出す研究者としての倫理感が、保育学徒には欠けていると、日本保育学会でも大会を運営する先生方が頭を抱えておられるのが現状です。けれど、保育学徒の研究者倫理については、実はかねてより重要課題であつたはずですから、懸念を共通の目標にすげ替えて、保育研究のさらなる発展に向けて努力すべき時期がきたのだと考えることもできるで

しょう。

『幼児の教育』のネット公開によって、先人の言説に触れやすい環境を手にしたのですから、その環境を享受する者は研究者としての倫理観を問い直し、先人の言を踏まえて研究に向き合う経験を自らに課さねばならないでしょう。それは、一研究者の分をわかまえる謙虚さといってもいいかもしれません。

#### ▼ネット活用によって見えてくるもの

卒業論文で氏原銀の実践史に取り組んだ懐かしい日々を思い起こしながら、「氏原銀」を検索してみました。学生時代の私に見せたら狂喜するであろうほど、その画面には見事に氏原女史の著した論考や童話の題名が並びました。第二十九巻第十号（一九二九年十月発行）の「静岡市私立櫻花幼稚園に付て」に始まり、氏原女史が（たぶん）持ち前の積極性、機動力によって各地の保育現場を視察し学んだ足跡が散見されます。また、第三十巻第六号（一九三〇年六月発行）の

論考「保育用人形芝居を觀て」や第三十一巻第一号（一九三二年一月発行）の「郡山市立郡山幼稚園の自然物應用手技に就て」のように、保育内容に関する実践者としての熱く深い研究心もうかがえます。長い長い時を経てなお、「一人の保育者」という真摯な生き方を見せつけられる思いです。

題名に惹かれて、幾つかの論考を選んで印刷してみました。選ぶ際、分厚い復刻版を何冊も並べてあちらの記事、こちらの記事と読み比べる労力が夢のように遠のいていることに気づきました。自分に必要な、手に置いて保管すべき記事はどれなのか、印刷物を読み比べて選ぶ作業はあまりに簡便で、ネットというツールが格段に効率を高めたことを実感しました。

今、私の手元にまとめた印刷物の束は、『幼児の教育』を私の視点で切り取った一つのまとまりのある歴史です。時間軸をさかのぼったところに点在していた氏原女史の足跡をつなげることが、現代に至って実現された証であります。別な視点を差し挟まない純粹性

は、注意を怠ると独断性を帯びてしまうかもしれません。簡便に得た資料の扱い方を私の当面の倫理として、慎重な読み方、解釈に留意するつもりです。

保育学徒は少々倫理観に欠けるところがあると申しましたが、それは子どもをいとおしむ者の「善さ」のようなものを自意識にもっているせいではないかと考えます。悪気はないけれど、先行研究を吟味せぬまま自論を展開してしまふ。倫理的でありたいと願うことをうっかり忘れ、なぜか自分は倫理的であると信じているところが、感覚や体質の変わらなさをもたらししているのではないのでしょうか。

ネットの使い勝手の良さは、それを私たちが利己的に用いるためにもたらされたのではなく、これを機に私たちがもう一度、開発された技術に知恵をもつて臨むチャンスを与えてくれたのだと考えます。保育実践も保育研究も、歴史の先端に今の私たちの営みがあります。画面で見られる保育の歴史が、今ここに私たちの営みと直結したことで、読み手である私たちの

「自由」が幅をぐんと広げました。自由を謳歌すると同時に伝統と今をつなげる仕事にどのような制約を敷くべきか、私たちが問われているように思うのです。

### ▼『幼児の教育』これからへの期待

集団施設保育の枠を出て、広く社会全体が子どもの位置づけを模索しています。不況の影響もあつてか、支援の旗のもとで子どもは時として、小荷物のように預けられ、または、「どこか」に預け先を探されています。『幼児の教育』はいつの時代にも社会の現状を受け止め、伝え、読者と共に模索の出口を考え合う専門誌であり続けてきました。

明日の保育をどうするかという保育者の「今日の迷い」に即答しようとする保育雑誌が氾濫している。今、『幼児の教育』は、この混迷の時代の保育関係者が省察を交える場であり続ける、その使命を受け継いでいただきたいと願つてやみません。

(千葉経済大学短期大学部こども学科准教授)